

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第3回

西洋文化発展への系口

1578(天正6)年、宗麟48歳の時に洗礼を受けます。洗礼名は「フランシスコ」。生涯で最初に出会った宣教師であり、大きな影響を受けたフランシスコ・ザビエルにちなみ、宗麟自身が選びました。

宗麟とキリスト教との出会いは意外と早く、感受性豊かな16歳の時。1545(天文14)年、府内(現大分市)に近い港に中国船が入港し、船には6、7人のポルトガル商人が乗っていました。ポルトガル人が、種子島で初めて日本の土を踏んだわずか2年後の出来事です。初めて目にする西洋人に、府内のまちは騒然となったに違いありません。

このとき、宗麟(当時は義鎮)の父(義鑑)に「彼らを殺して財産を奪えばよい」と進言する者があり、父は殺害を企てようとしています。これを知った宗麟は、「欲にかられて罪もない外国人を殺してはならない。貿易をしようと遠方から来た彼らをむしろ保護すべきだ」と進言し、父の蛮行をいさめました。宗麟の進取・開明の気性が、府内の南蛮貿易への扉を開くことに大きく影響したのです。

その後、アラゴンというポルトガル商人が府内に訪れます。彼は、朝には書物、夕方にはコンタツ(キリスト教信者が使用する念珠^{ねんじゅ})で祈りを唱えていました。宗麟は、片言交じりの日本語を話す彼に、信仰についてさまざまな問い掛けをする中で、次第に深い関心を寄せるようになります。このことが後にザビエルとの巡り合いへとつながり、豊後府内の華々しい西洋文化発展の端緒となったのです。



中世大友府内町跡から出土したメダイ(メダル)

【県教育庁埋蔵文化財センター蔵】

発掘調査では、真鍮製のチェーンや指輪、ペネチアンガラスなど、ヨーロッパから持ち込まれた品々のほか、キリスト教徒が身に付けていたメダイやコンタツも多数見つかっており、町人にまで信仰が根付いていたことを物語っています。

お問い合わせ 文化財課 ☎537-5639